

説明を要する程のものでない。

七、第十七行第四語 *tinliq* は寫眞には *tiny* で第二の母音 *i* は出て居ない。勿論兩子音の間には此の母音の省略してあることは明らかであるが何故に此の場合のみ母音を補つたのであるか、もしかくの如くトランスクリプションするならば他の語の母音を省略せるもの多々あるのを補つて置かねばならぬ筈である、トランスクリプションは甚だ注意すべきものと思ふから特に茲に一例を擧げたのである。

八、第十八行第五語 *kork lari* を「現ハレ」と譯して「一切諸色現ハレ」としてあるが宜しくない、これは *kork* 「*kor*」即ち「姿」なる名詞の複數でまさに漢譯の一切色相の「相」に相當するのである、漢譯に「一切色相皆於中現」とあるから「現ハレ」といふ動詞に見られたのであらうが、何としても此の語が動詞に見られる理由はない。

九、第十九第二十の兩行に互る一句に注して「此句は支那譯に缺く、光中衆生の色相を菩薩の觀察をなすの義なり」としてあるが、實は漢譯にも出て居るのである、前節にのべたやうに譯者は *kork lari* を動詞に見て「現ハレ」と解したから、第十六行―第十八行で一句と見たであらうけれども、此の語の解釋の訛れること上の如くであるから、勿論第十六行―第二十行で一句であつて、能く漢譯の意と合して居る、序に記して置くのは第十九行の第二語は果して *birca* と書かれてあるであらうか、寫眞によつては解らないけれども大抵の場合には *barca* と記してある字だと思ふ、又その第四語を *skin* と寫してあるのも果してその通りであるか、二十二頁の石版によつて見ると終りの字は *o* でなくて *n* の様に思はれる、しかしこれも寫眞では判然しないからたゞ疑にとどめて